

## 「労働組合は『変な団体』ではありません」

### Z世代は「団結ガンバロー」をどう受け止めるか

金融・労働研究ネットワーク 田中均

「労働組合は『変な団体』ではありません」

先日、金融単産で24春闘に向けた支部・分会の代表者会議取材しました。委員長から世界経済、日本経済、当該金融業態をめぐる情勢報告があり、分散会に分かれてそれぞれの職場実態が報告されました。職場実態の中で特に興味深かったのはテレワーク、在宅勤務の広がり職場の労働者の受け止め方です。

この問題については、別に分析したいと思えます。いろいろな問題の受け止め方が世代によって違う。その違いを理解し力にしていこうとする配慮が議論の中でうかがえました。

会議最後の閉会のあいさつで、その世代の違いへの配慮が象徴的に、そしてユーモラスに示されました。閉会にあいさつから恒例の「団結ガンバロー」に移る瞬間の一言。

「これから何が行われるでしょうか。…労働組合は『変な団体』ではありません」と言って「団結用意！」のかけ声が続きました。実は、この会議には「団結ガンバロー」が初体験かも知れない若い仲間も参加していました。

その若い仲間たちがどう受け止めるかへの配慮が「『変な団体』ではありません」というユーモラスな言葉となったのでしょうか。労働組合のベテランは何の違和感もなく反射神経のように唱和しますが、初めて経験する世代はどう感じるか。

私は、この一言に、自分の初体験を思い起こしました。私の「団結ガンバロー」初体験は1968年、大学受験の受験勉強をしていたときです。ベトナム戦争で北爆(米軍の爆撃機=主としてB52による北ベトナムのハノイその他への爆撃)の様子が連日報道され、世界中で反戦運動が広がっていました。

私の「団結ガンバロー」初体験

大学受験をひかえた受験生でしたがじっとしていることができなくて、街頭で配られるビラの連絡先に電話をかけたり、アメリカの領事館で関連資料を入手したりしていました。配られたビラを頼りに参加した集会で「団結ガンバロー」を初体験しました。

じっとしていられなくて参加した集会です。発言のほとんどに共感し、自分もたたくいに参加しているという感激がありました。しかし、集会の終わりに「団結ガンバロー」のかけ声で一斉に声を上げ、こぶしをつき上げる光景に違和感がありました。受験勉強で、集団行動になれていなかったからかも知れません。「『変な団体』ではありません」に55年前の初体験がよみがえったのです

当時、ベトナムから代表団が札幌にも回ってきて、一種の物産展を開いていました。ベトナムで撃墜した米軍機の残骸から製造したジュラルミンの鍋やフライパン、ペーパーナイフなども販売していました。ジュラルミン製品に番号が打ってありその番号はベトナムで何番目に撃墜された米軍機かを示す番号でした。

ジュラルミンの製品は、受験生の悲しさでお金がなくてあきらめて、一緒に展示されていた南ベトナム民族解放戦線が大砲に詰めて米軍に向けた散布しているというビラを一枚いただきました。ビラには英語で「ジョンソン(ジョンソンは米大統領)よ、今日おまえは何人の子どもを殺したのだ」という書き出しで始まっていて、今も宝物にしています。

その後金融労働運動に参加して、「団結ガンバロー」は生活の一部になりました。